
零～宵闇の詩～

九十九閃李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零々宵闇の詩々

【Nコード】

N0652I

【作者名】

九十九閃李

【あらすじ】

『アナタは霊って信じますか？』森の中に、林の中に、井戸の中に、池の中に、箱の中に、アナタの後ろに……これはそんな見える少年少女のちょっとした物語です……

登場人物紹介（前書き）

このお話はホラーゲームの零シリーズ（株）テクモ様作）を元に作成されたファンフィクション小説です。

二次小説ですので勿論テクモ様との関係等はいりません。

ご理解の上お読み頂ければと存じます。

登場人物紹介

登場人物紹介

オリジナルキャラクター

名前：水無月 奏

年齢：17歳

設定

零々月蝕の仮面々に出てくる水無月流歌の二歳年下の弟

ややシスコンでオタクチックなヘタレ

しかし目の前で困っている人をほおっておけないお人好しでもある。

霊力に関しては常人より少し優れている程度で、姉や母には遠く及ばない。

一応剣道を習っているため常人よりは剣術に優れるが、所詮剣道なんてただのスポーツと割り切っている。

名前：平坂 梓

年齢：17歳

設定

零々zero々に出てくる平坂巴の歳の離れた妹

好奇心旺盛な性格で微妙に腹黒いが基本的には前向きなタイプ

他人の秘密を知りたがるというのはた迷惑な癖を持つが口はかなり堅い。

姉よりも強い靈感を持ちその強さは天倉繭並。

昔奏に助けられた過去を持ち、以降奏に必要とされようといろいろな行動起こすが空回り気味。

彼女が報われる日は来るのだろうか？

筆者にも謎である。

零（zero）主人公

名前：雛咲 深紅

年齢：17歳

小さい頃から強い靈感を持っていた。

そのことから幼い頃より苛めや仲間外れなど辛い生活を強いられていたため非常に人見知りが激しく、また疑心暗鬼に陥りやすい。心から信じられるのは血を分けたたった一人の兄さんだけ。

だったのだが同じ靈感を持つ人間に対してはある程度理解を示す。

基本的に丁寧な口調で対応しあまり感情を表に出さないが、それは他人を信じる事が出来ず、『知り合い』程度の付き合い方しか知らないからなのかもしれない。

あと無類の猫好きだったりする……

零々zeroサブ主人公

名前：雛咲 真冬

年齢：23歳

入社したばかりの新人でありながらかなりの実力を持ち、雛咲 深紅を一人で養うシスコン気味の天然お兄さん。

深紅に比べれば幾分ましたがそれでもかなり人見知りが激しく相手に心を許せないタイプの人間。

しかし根が優しくすぎるため霊相手でもすぐ感化されてしまう節がある。

奏のことはよき弟分として理解し、認めている傍ら、深紅を狙っているんじゃないかと変に勘違いし暴走する節がある。

おそらく当作品内で一番性格が改変されている可能性の高いキャラクター。

以上

話が続くようであれば追加します。

各キャラクター達の年齢は零々zero時のものであり、他の作品の時間軸は以下の通りとする。

零々月蝕の仮面

←

零々zero

←

零々紅い蝶々

←

零々刺青の聲

登場人物紹介（後書き）

ぬこガード!!

…… よしもういいかな。

どうも、はじめましての方ははじめまして。

別作品を見て頂いている方はお久しぶりです。

執筆者の九十九閃李^{つくもせんり}です。

おい九十九、お前他の連載ほっというて何やってんだ！

とツツコミがとんできそうな気がしましたが、大丈夫ですよ（多分）。

九十九が本気を出せば連載小説の一つや二つ……ごめんなさい。
嘘つきました。

まあひとまず気分転換に他の作品に手を出すこともあるかと思いますが
すが生暖かい目で見守って頂ければと思います。

それでは今回はこの辺で……お憑かれさまでしたー！

零〰zero〰編プロローグ（前書き）

このお話はホラーゲームの零シリーズ（株）テクモ様作）を元に作成されたファンフィクション小説です。

二次小説ですので勿論テクモ様との関係等はございません。

ご理解の上お読み頂ければと存じます。

零～zero～編プロローグ

夢を見ていた。

それは昔”視た”ことのある”悪夢”と似たようなもの。

あの”悪夢”じゃない。

けれどあの”悪夢”と同類のもの。

その張り裂けそうな雰囲気と背筋を襲う寒気がこれを夢か”悪夢”かと錯覚させる。

俺は今何処に居る？

判らない。判りたくもない。

これは夢か？それとも現実か？

昔とある有名な人物がこんな言葉を残している。

” 現世は夢。 夜の夢こそ真 ”

その言葉通りだとするならば俺にとってこの ” 悪夢 ” は夢ではなく現実なのだろう。

誰が求めたわけでもない、俺の、俺だけの現実。

それが……この ” 悪夢 ” ……

「 奏、そろそろこの現実を受け入れてくれたかい？ 」

「 いや、真冬兄。これそんな簡単に受け入れるなんて無理ッスよ 」

前言撤回。やっぱりこの ” 悪夢 ” を現実として受け入れるのは無理がある。

っていうか無理だ。

「 第一何が悲しくて男が二人、こんなオンボロの幽霊屋敷に来なき

やなんないんツスカ!!」

「ははは…それは高峰先生と助手の巴さんがここに取材に来てから音信不通の行方不明になってしまったからだよ」

真冬は軽く笑いながらその理由を口にした。

まあ俺もそれは理解してるし原因もおおよそ検討がつくわけだが……

「はあ……」

一つ溜め息をつく俺は眼前のものを射抜かんばかりに睨み付けた。

俺達の前に聳^{そび}え建つ大きな屋敷、名を氷室^{ひむろてい}邸。

そこで真冬兄の恩人の高峰先生と俺の悪友の姉で高峰先生の助手の平坂巴さんが原因不明の行方知れずになったのでこうして探しに来たわけだ。

なんで俺達が二人だけでここに来たのかと言うと、真冬兄曰く『どうせ同じ場所に来るんだから一緒に行こう』とのこと。

真冬兄の妹の深紅は学校があるし、もしものがあつたとしても巻き込まれる心配のないように留守番させている。

まあ俺も深紅と同年だから学校があるわけだが、優等生の深紅と違い問題児の俺は学校を休んでいてもあまり支障をきたさない。

……約一名が暴走しそうな気がするがまあその事は追々考える事しよう。

ちなみにその暴走しそうな悪友には今回の事を伝えていない。

こういう状況なら楽しんで、とはいかなくとも絶対に無理矢理参加してきそうだったからだ。

別に参加してはいけないわけでもないが、最低でも自分の身は自分で守ってほしい。

しかしその暴走しそうな悪友にはこの”悪夢”に対抗する術すべを持っていないのだ。

来たいのは解る。

実際自分の姉が行方不明なんて聞いたら俺だって探しに行ってしまうだろう。

しかしそれでもこの”悪夢”に対抗出来ない人間を連れてきて、むやみに危険に晒させるわけにはいかないんだ。

だからこそ俺は何も告げずにここに来た。

実際に来て予想は的中したためよかったと思う反面、またこの”悪夢”と対面することに正直恐怖を覚えた。

ぶっちゃけるなら何の用事も無ければ今すぐ廻れ右して退散したい衝動に駆られる。

しかしそういう訳にもいかないのだ。

俺は再び溜め息をつくと背負っていた相棒を背負い直し中に入ろうとしている真冬兄の後に続き足を踏み入れた。

これが後に二人の少女をこの氷室邸に導く事件のきっかけになっていようとは、この時本人達でさえも気付くことはなかった。

零〜zero〜編プロローグ（後書き）

梓「ふっふっふっ……ついに！ついに私の時代がやって来たわああ！……」

奏「しばらく顔見せないと思っていたらこんなことしてたのか……」

梓「ふふっ♪九十九を監禁して調教……ゲフンゲフン、誠意ある説得でついに零シリーズを書き始めることが出来るようになったわ！これで邪魔な狸娘や白い悪魔、金の死神に邪魔されることなく奏と二人っきり……に……」

深紅「私のことは気にしないでいいですよ。続きをどうぞ」

流歌「奏……死んじゃ嫌だよ？」

奏「ちょっ深紅！なんもないから！ホントになんもないから！！それに姉さん何さりげなくとんでもないこと言ってるんだよ！姉さんが言つと洒落にならないって！」

梓「くっ……またしても……」

まあわかりきってたことですよね。

そんなわけで零シリーズの連載が始まります。

読んでやってもいいぜ！って方は次回もよろしくお願いします。

第壱夜 氷室邸（前書き）

このお話はホラーゲームの零シリーズ（株）テクモ様作）を元に作成されたファンフィクション小説です。

二次小説ですので勿論テクモ様との関係等はございません。

ご理解の上お読み頂ければと存じます。

第壱夜 氷室邸

第壱夜 氷室邸

玄関に足を踏み入れ、まず目に入ってきたのは、中間辺りより碎け落下してきたと思われる梁^{はり}。

そしてその梁により碎かれたと思われる階段や床。

壁なんてものはすでにぼろぼろの満身創痍な状態で、少しでも殴り付ければ碎けてしまうほどに脆い。

下手な雑草等が生えていないのは、ここが生きている者の居るべき場所ではないことを、暗示しているようにも思えた。

「奏、気付いてるかい？」

真冬は氷室邸の中に入った瞬間感じた違和感を確認するため奏に声をかけ、

「ええ。まあなんとなく」

——と返した奏の言葉を聞きながら、まだ屋敷に入っただけだと

いつにも関わらず冷や汗を流した。

本能的にここは危険だと言っているのだろう。

外から見ただけでもその危険そうな雰囲気^{きひす}に、踵を返したい気持ちでいっぱいだったというのに、さらに奥に入って来たのだ。

誰でも億劫になるだろうことは間違いない。

「気付きたくはなかったんですけど、ね・・・」

ここがただの廃屋なら問題は無かった。

けれどここに充満している淀んだ空気はここがただの廃屋ではなく、
”悪夢”と同質のものであることを示しているに他ならない。

これは縛られている・・・？

いや、違う、これは引っ張られているんだ。

「高峰先生！！高峰先生、いらっしやいますか！・・・！」

玄関に真冬の声が響く。しかしそれに答えるものは誰一人としていなかった。

「・・・。いこう、奏。早くしないと手遅れになってしまう」

「・・・了解」

- - - - -

歩く度にぎしぎしと今にも床が抜けてしまいそうな音を立てつつ、真冬と奏は奥へと歩いていく。

「縄・・・？」

玄関から続く戸を開けるとそこは細長い廊下。

しかもそれがただの廊下であれば驚くこともなかったというのに、その廊下は何の嫌がらせか、梁にたくさんの縄を吊り下げ垂れ流し侵入者を拒んでいるようにも思えた。

垂れ下がった縄は一本一本が微妙に太いため、通るのにもぶつかっ

て邪魔になるし、当たれば当然痛い。

なんだ？この屋敷に住んでいた人間はみんなこんな縄に当たることに喜びを感じるM属性の人たちだったのか？

こんな場で不謹慎とは思いながらもそう心の中で呟く。

そんな時だった――

”ギシッ”

俺のでも、そして真冬兄でもない床を踏む音が聞こえた。

咄嗟に音の方を見ると誰のかは判らないが人影のようなものが突き当たりの道をまっすぐ進んでいく姿が見えた。

「高峰先生・・・？」

真冬兄が呟いたその言葉を聞き、俺もようやくその人影の持ち主が高峰先生であることを認識した。

けれどあれは・・・誘っているのか？

「「・・・」」

俺達は目を合わせると頷き合い、ゆつくりとその人影が消えていった方へと進んでいった。

それぞれの手に己の獲物を握り締めながら――

――

大きな鏡の設置してある突き当たりから人影の消えた方へ向かうと、そこには戸が一つあっただけだった。

その戸をゆつくりと開けると、そこは埃被った箆笥や、鎧兜や、獅子の頭等様々な物が置かれた所謂憩いの場、とも言える場所に繋がっていた。

とは言っても今の状況からすれば、それは憩いの場にはなりえない状況ではあるが・・・。

中に進んでいくと、玄関ほどではなくとも、やはり床や壁は朽ちているようで、少しでも力を込めれば碎けてしまいそうだった。

「奏、これを」

少し進んだところに少し大きめの囲炉裏が設置されていた。

その周りだけは埃も払われており、囲炉裏も何度か使われた形跡が残っていたため、おそらく高峰先生達はここで夜を迎えていたのだろうことが容易に想像出来た。

とは言っても――

「使われてからそれなりに時間が経過しているようだ」

ここが普通の家であれば囲炉裏はここにしか無いはず……。

そう考えると嫌な予感が更に強くなる。

「急ごう。手遅れになる前に先生達を救い出すんだ」

「了解」

心の焦りから周りが見えなくなる前に、少しでも安心出来る情報を

手に入れる。それが先決。

こついつ時こそ経験がものを言う、と言っのdarou.

俺達はそれぞれ別れながらその囲炉裏の間を中心に辺りを散策し始めた。

- - - - -

「真冬兄、ちょっと来て下さい」

それぞれ別れて散策してから十分ほど経っただろうか。

囲炉裏の間のすぐ傍にあった階段から二階に上がり、軋む床に怯えながらも進んだ先で、俺は一冊のノートを見つけた。

「これは――」

「おそらく高峰先生達のノートだと思うんですが・・・真冬兄？」

真冬兄にノートを手渡した瞬間、真冬兄の顔色が急に悪くなった。

ああ・・・もしかすると真冬兄は”視ている”のかもしれない。

俺には判らないが、真冬兄のように強い靈感の持ち主は、強い思念の籠った物に触るだけで、その思念を”視る”ことが出来るらしい。

俺には真冬兄や姉さん達のような強い霊力も靈感も持っていない。

だからそのノートに触ってもその思念を視ることは出来なかった・
・もしかしたらその思念から何か情報が得られるかもしれない。

「奏・・・」

しばらく呆然としていた真冬兄が帰ってきたかと思うと、顔色はもう倒れるんじゃないかと思えるぐらい真っ青だった。

——嫌な予感がする。

「何か視えましたか？」

少しでも落ち着かせようと極力柔らかい口調で問う。

しかし真冬兄はなんと言葉にすればいいのか解らない、といった表情で顔を強ばらせていた。

” ギシッ ”

そんな俺達の元に響く床の軋む音。

もちろん俺や真冬兄のものじゃない。

” ギシッ・・・ギシッ・・・ ”

段々と近付いてくるその音に俺は自然と真冬兄の前に出ると背負っていた袋から木刀を抜き放ち構えた。

” ギシッ・・・ギシッ・・・ギシッ・・・ ”

目には見えない、けれど何者かが” 居る ”ことは解る。

ゆっくりと近付いてくるソレに俺は幾ばくかの緊張と、恐れと、怒りを覚えた。

”ギシッ・・・ギシッ・・・ギッ”

音が——止んだ。

「はぁッ!」

気合いを込めて横に一閃。

俺の少ない霊力を凝縮させたこの木刀の一撃に、霊は堪らず後退したようだった。

今度は目に霊力を集める。

すると薄らとだがその霊の姿が俺の目にも映し出された。

右に、左に揺れる霊目掛けて、再び踏み込みと共に一閃。

自らの理性に従順なのか、それとも学習能力が無いだけなのか、霊は再び俺の一撃で反対側の壁まで吹き飛んだ。

——これが俺のこの”悪夢”に対する対抗手段。

姉さんや母さんよりも段違いで俺の霊力は低かった。

けどそのおかげでか、俺はある一点のみ自身の霊力を集中させる、という術を手に入れた。

そして俺は素振りによく使う自分の木刀に、毎日欠かさず自分の霊力を注ぎ込み、結果いつしか俺の木刀には霊力を溜め込む力が生まれた。

溜め込まれた霊力はその溜め込まれた分だけ霊に対して効果を発揮する。

その結果、見て分かる通り俺は霊を反対側の壁まで吹き飛ばせるほど、強力な一撃を与えることが出来るようになったのだ。

しかしその能力にもいくつか欠点がある——

「真冬兄、止めは任せましたよ！」

そう、その欠点の一つに俺の攻撃は霊に対してダメージを与えることしか出来ないのだ。

弱体化させることは出来たとしても姉さんや真冬兄のように除霊することは出来ない。

だから霊は厄介なんだよな・・・。

そんなことを考えている間に、既にぼろぼろだった霊は真冬兄の持つ”視えざるものを写す”ことが出来る摩訶不思議な機械、射影機によって封印されていた。

「相変わらず射影機のパフォーマンスは凄いですね・・・」

その材料に自分の知っているものが使われていると思うと、少し変な気分になるが、だからといって何かなるわけでもない。

そもそも射影機に関しては既に俺には使えない物だってことが判っているからこそ、羨ましいとは思いが諦めもつく。

真冬兄はどこか曖昧な笑顔で俺に答えると、また少し寂しく笑った。

「手が、ね」

「手……？」

唐突に話されも……。一体何のことだろうか？

手……。手……。手……。手でも生えたんだろうか？

そしてそこから美少女が現れて……。ってそんな話あるわけないか。

「高峰先生と巴さん、後編集者の緒方さんが無数の手に襲われていたんだ」

「無数の手……。ですか」

この家から抜け出せない霊達が救いを求めているのだろうか？

「そして……。白い着物を着た女性」

「白い着物を着た女性……。ですか」

自縛霊の類い・・・だけでは済まされなさそうだ。

もしかしたら――

「急ごう、先生達が危ない」

床が壊れるのもいとわないうちにずかずかと進んでいく真冬兄の後ろ姿を眺めながら、俺はある予感めいたものを感じていた。

「奏。何ぼさつとしてるんだ」

「あ、はい。っていうかここ今にも碎けそうで怖いんツスけど!!」

あまり高さが無いとは言ってもこの二階から落ちれば絶対に怪我する。

下手をすれば怪我だけじゃ済まされないかもしれない。

仕方なく俺はまた来たときと同じようにびくびくしながら一階へと降りていった。

- - - - -

「真冬兄、どうします?」

無事一階に戻ってこれた俺は、囲炉裏の側で佇む真冬兄に尋ねた。

「・・・少し危険かもしれないけれど、二手に別れて探してみるかい?」

普通であれば頷くところだけれど、どうしてもさっきの予感が頭から離れない。

杞憂に済めばそれに越したことはないけれど、こんなときの俺の予感は大抵当たってしまう。

だからこそ――

「さすがにそれは危険過ぎると思います」

否定の意を表した。

俺の予感が正しければその白い着物を着た女性は――

「・・・。そう、か。まあ奏がそう言うならそうなんだろうね」

真冬兄・・・少し俺を買い被りすぎな気が・・・

そんなことがあってかひとまず俺達はこの部屋から出ることにした。

この部屋から続く部屋にはすべて鍵がかけられており、行く当てもないので別の部屋を探すことにしたのだ。

部屋から出ると、真っ直ぐ先にもう一つの戸が見えた。

なるほど確かに。

普通に考えればこんな形の廊下を作るなら反対側にも何かしらあっておかしくない。

向こうの部屋へ向かうため俺達はその廊下の中央、大きな鏡の前を通り過ぎる時、それは起きた。

「「っ?!」「」

まるで金縛りにでも会っているかのように、強力な力で体の動きが封じられた。

その力の名前を現すなら・・・そう、”恐怖”。

恐る恐るその力の方へ視線を向けると、そこには白い着物を着用し、何十という怨霊を纏った女性が立っていた。

「・・・ッ」

あまりの恐怖に声が出ない。

これは——そう、危険過ぎる。

前見た悪夢と同等の、傍に居るだけで中てられてしまつほど強力な霊。

このままじゃ俺も真冬兄も・・・殺られる!!

なんとか体を動かそうとするもそれはほんの僅か。

進むことも、後退することも出来ない、まさに生き地獄。

俺達がそんな様子なのを知ってか知らずか、その女性は口元に笑みを浮かべながら俺達に近付いてくる。

いや——真冬兄に向かっている？

いよいよその女性が俺達の目と鼻の先にまで来ると、ゆっくりとその手を真冬兄にまで伸ばし——

「っ……させるかよー!」

真冬兄に触れるその瞬間、俺の木刀により弾かれた。

そのことに驚いているのはその女性と俺自身。

女性は何故驚いているのか解らなかったが、それも一瞬のこと。

再び不敵な笑みを浮かべると、今度は俺の方に手を伸ばしてきた。

対して俺は全力で打ち払ったにも関わらず、後退する素振りも見せ

ないその女性に、絶望に近い感情を抱いた。

「ちっ・・・クソっ」

悪態をついても意味はない。

本能的にその女性に掴まされるとヤバいと察した俺はなんとか手を避け、打ち払いながら真冬兄から離れた。

「真冬兄!!」

距離を置いてようやく動けるようになったのか、真冬兄もその女性に射影機を向ける。

しかし何枚が撮っているようだが一向にダメージを与えているようにも見えない。

こうなったら・・・逃げるが勝ちか！

「真冬兄！俺が時間を稼ぐから先に逃げて!!」

「奏?!何を言ってるんだ!!」

「このままじゃコイツには勝てない！対策を練るためにも・・・早く！！」

「し、しかし」

何を思っているのか解らないけれど、真冬兄は渋っているようだなかなか動こうとしなかった。

その間にもその女性からの攻撃は止むことも無く、俺はひたすら耐えていた。

しかし正直あとどれぐらい耐えられるのか解らない。

木刀に込められた霊力ももうあと僅かになり、それ以前に木刀自体がみしみしと悲鳴をあげている。

正直な話として俺は今とてつもなく硬いコンクリートを殴っているような感覚だったりする。

普通の霊であればその体は霊体のため、俺の木刀をすり抜けるはずなんだが、その女性に対してはすり抜けるどころか跳ね返されている感覚がある。

実際それだけ力の差がある、と言うことなんだろう。
そんなやつにどうやって対抗すればいいのかさっぱり解らない。

けれど今はそれよりも――

「真冬兄だと足止めも出来ないだろ?!」

「っ……」

高峰先生達を探すために……今は、今は――!!

「奏……」

「さっさと行け!! 雛咲真冬!!」

俺の罵声にようやく真冬は踵を返すと囲炉裏の間の方に向かって行った。

「絶対に、絶対に来るんだぞ! 奏!!」

——と言いつながら。

しかしその声が届いて間もなく、無惨にも俺の木刀は女性の手に
より払われて砕け散った。

角に追い込まれた俺に出来ることはもう何もなく、

「姉さん・・・ごめん」

俺の意識はそこで途切れた。

” アナタニモ同ジ苦シミヲ・・・ ”

第壱夜 氷室邸（後書き）

おは幼女、ロリこんにちは、ロリこんばんは。

執筆者の九十九です。

サイトがリニューアルされてから初の投稿になりますが、なんといいますかまだ慣れませんか。

そもそもケータイで更新するのに慣れないという・・・

まあそんな九十九のことなんてどうでもいいか。

とにかく今回の話はゲーム中九十九が思ったことをそのまま書いてます。

プレイしたことある方なら気付いた方もいらっしゃるかと思います
が、もう何十年も放置された家だっているのに家の中には雑草とか
全然生えてないんですね

しかも竹とか綺麗に生えてるし・・・はっ？！

もしかして霊が整えてる？！

「芝を刈る男」とか「竹を切る男」とか居てもいいとは思いません
んか？

後深紅とか真冬って家の中平気で走ってますけど崩れる心配とかし
てないんですかね？

考えれば考えるほど謎が増えていきます・・・。

では一先ず今日はこの辺で・・・お憑かれさまでしたー

第貳夜 音擦れ（おとずれ）（前書き）

当小説は株式会社テクモ様作、零（zero）を元に作成された二次小説となります。

そのためテクモ様とは何の関係も御座いません。

また、当小説を読み不快に思われた方は一刻も早く忘れてしまった方がいいかと存じます。

それでは下記に当てはまらない方のみ本編へどうぞ。

当てはまる方は注意の上自己判断をお願いいたします。

二次小説が嫌い。

原作無視が嫌い。

ネタバレが嫌い。

オリジナルな登場人物が嫌い。

九十九が嫌い。

目玉焼きにはしょうゆだろ？！

いや、ソースだろ？！

ここはあえて塩で！

第貳夜 音擦れ（おとずれ）

第貳夜 音擦れ（おとずれ）

兄さんから高峰先生の足取りが掴めたので後を追う、と連絡があったから二週間が経ちました。

初めは同級生の奏も連れている、とのことなのですぐに帰ってくると思っていたのですけれど……。

日を追うごとにもう兄さん達は帰って来れないんじゃないだろうか、という嫌な予感が膨れ上がるばかり。

その間兄さんから連絡が一度もなかったことが、余計に拍車をかけたのだと思います。

——そんなある日のことでした。

「ねえ、深紅。ソウちゃんのこと何か知らない？」

同級生、というよりも友達、といった方がいいのでしょうか。

高峰先生の助手を勤める平坂巴さんの妹、梓が最近（本当は理由があるのだけれど）無断欠席を続けている奏の不在に訝しみ、何か知っていないかと聞いてきました。

最初の数日は奏成分が足りない、等よくわからない話をしていたのですが、最近は何か考え事をしている日が増えたような気がします。

まあきつと奏のことですから梓の性格を踏まえた上で、何も言わずに行っただけでしょうけれど……。

本来であれば事情が事情だけに、このトラブルメーカーには黙っていたほうがいいでしょう。

——でも

「奏のこと、知りたいですか？」

ごめんなさい、奏。

さすがに今回はかりは私も梓を止めようとは思いません。

私も、梓も、貴方達を心配しているのですから。

——そして私達は今ここにいます。

兄さんと、高峰先生と、巴さんと、奏が向かったと思われる場所、氷室邸の前に……。

- - - - -

ソウちゃんと連絡がとれなくなってもうどれだけ経ったんだろう……。

それは四日や五日ぐらいだったのかもしれないけれど、一年や二年のようにも思えてしまう。

それだけ私はソウちゃんに依存しているんだ、と改めて実感すると共にそれがまた嬉しくも思える。

姉さんに関してはいつも高峰先生中心に世界が廻っているような人だから、あまり気にしてないけれどソウちゃんに関しては別。

ソウちゃんのお姉さん、流歌さんに話を聞いたけれど今はまだ秘密、

としか教えてくれなかったし、友達の深紅に話を聞こうと思って、お兄さんの真冬さんが高峰先生を探しに行ったとかで上の空。

深紅のブラコンっぷりには少し呆れるものがあるけれど、私のソウちゃんに対しての思いと似たようなものかもしれない。

だとしたら私が何か言えるような立場のわけないし、どちらかといえば共感する方。

ただ深紅の場合その依存に愛情に近いものがあるのが心配なところ。

兄妹って困った関係だよね・・・。

一番近くにいるのに交わることが許されない。

近親相互っていうんだっけ？

それに比べて私とソウちゃんとは幼馴染みだからまだまし、かな。

話がそれたけどソウちゃんと連絡がとれなくなって暫く経ち私はもう一度深紅に話を聞くことにしたの。

そしたら深紅は何か決意したような表情で私に教えてくれた。

高峰先生の行き先。

真冬さんのこと。

そしてソウちゃんのこと。

「私は兄さんを探しに氷室邸に行ってみようと思います。梓はどうしますか？」

聞かなくても解ってるくせに。

「そんなの決まってるじゃない」

ソウちゃんを捜す。

それが今の私の目的。

・・・あと姉さんもね。

私はその話を聞いてすぐに学校から帰ると出かける準備をし始めた。

もちろん氷室邸に行く準備。

お母さんには書き置きを残しておけば問題ないだろうし、お父さんに関しては当分帰ってくる予定がないみたいだから特別何かする必要はなし。

さあ！いざ往かん！氷室邸！

と家から出たその時――

「梓ちゃん」

「え．．．？流歌、さん？何でこんなところに？」

まるで待っていました、と言わんばかりの笑顔で私を迎えてくれたのは流歌さんだった。

しかしそれも一瞬。

流歌さんは困ったような、悲しいような表情のまま言葉を紡ぎだした。

「奏の話、聞いちゃったんだよね」

「・・・はい」

「なら、これを」

「え・・・？」

流歌さんから手渡されたのは何やら大きい――

「カメラ・・・ですか？」

とはいっても普通のカメラよりも妙にゴツゴツしているし、不思議な構造をしている。

触れた瞬間頭の中に流れる記憶の断片のような不思議な映像。

それだけでこれは普通のものじゃないことが解った。

これは・・・一体？

困惑している私に流歌さんは簡単な操作説明と、これの名前を教え
てくれた。

「これは射影機っていうの。本当は・・・これを使わせたくなかつ
ただけど。でも多分、必要になると思うから」

「射影、機・・・」

必要になるって・・・どういうこと？

もしかして流歌さんは何が起きているのか知ってるってわけ？

「これは普通の人には” 視えない ” ものを撮り、” 封じる ” ことが
出来るもの。でも気を付けて」

「え・・・？」

「気を抜くと、連れていかれちゃうから」

「瞬何のことを言ってるのか解らなかったけれど、すぐに”見える”人の私はその意味を理解した。」

だからこそ、私はそんなものに負けないよう、力強く応えた。

「流歌さん、ソウちゃんは私が絶対に連れて帰ってきますから！」

「梓ちゃん・・・」

「だから帰ってきたらお義姉さんって呼ばせて下さいね!!」

「う、うん」

そして私は今深紅と共にここに居る。

ソウちゃんと、真冬さんと、姉さんと、高峰先生が向かったと思われる場所、氷室邸の前に。

- - - - -

時は子の刻。

廃屋となつてなお壮観な趣を残す氷室邸の前に、二人の少女が立っていた。

二人を照らすのは欠けることない大きな満月。

もう秋だというのに嫌というほど静かな氷室邸には、照らす月光の影響からか、余計に禍々しさと神秘性を体現しているようにも思えた。

なるほど確かに。

これなら高峰先生が目をつけたのも理解出来る。（といっても先生の関心を惹いたのは伝承されるとある儀式と惨殺事件だったらしいけど）

まあなんにしても――

「真っ暗ねえ……」

門を見上げながら呟く梓に深紅は怪訝な顔をしながらも、ここに着く前に一度提案したことを再び提案することにした。

「やはり下の村で朝まで待たせて貰いましょうか？」

「冗談！早くしないと！手遅れになってからじゃ遅いのよ！」

しかしそれでもなお、梓は早く来ることに拘っていた。

梓がなぜ急いでいる、いや焦っているのか解らなかった深紅はこの氷室邸にまで来てようやくその意味を悟った。

見た瞬間、近付いた瞬間体の中を何か凍てついたものが通り抜けていく。

それは所謂悪寒、というものだがただの廃屋であるこの館に一体何がここまで圧迫感を、緊張感を、違和感を感じさせるものがあるのだろうか？

館を囲う雑木林だろうか？

木々を揺らす風の音だろうか？

秋の訪れを知らせる風の冷たさだろうか？

——否

この屋敷の、いや、この地そのものが絶大な靈気を発しているためだ。

墓場や水場でもここまで巨大なものは感じたことがない。

平たく言えば”異常”な場所とだけ言っておくべきだろうか。

そんな場所に来たというのに、梓はまったく怯える素振りがなかった。

そんな様子を見て深紅は強いな、と思う反面自分も強くあろう、と改めて決意する。

「いくよ、深紅」

「ええ。行きましょう、梓」

ゆっくりと門を開くと埃と共に淀んだ空気が押し寄せ陰鬱な気分させる。

しかし二人はそんなものにもめげることなく、足を踏み入れていった。

そんな光景を館の中から見守る存在に気付くことなく――。

- - - - -

屋敷に入った瞬間まるでフラッシュバックするかのように目の前の光景が切り替わる。

砕けた鏡、開く門、そしてそこから這い出る手、手、手、縄、手、手――。

「――ッ?!」

しかしそれも一瞬。

瞬きする間に視界はもう元に戻っていた。

今は・・・一体・・・？

「ねえ、深紅——今の・・・え・・・？」

深紅も同じのを見たのかもしれない。

そう思っ^て深紅の方を振り向くと、そこには目を見開き顔を強ばらせている深紅と、そしてその後ろに立つ和服を着た幼い少女・・・。

『助ケテ・・・』

聴こえた、とい^つても耳から聞こえたわけじゃない。

まるで頭の中から響くようにその声は聴こえた。

深紅もその声に気付いたのか急いで振り返るも、すでにそこから少女は消えていた。

「今・・・後ろから・・・梓？どうかしましたか？」

おそらく今の私は相当驚いた顔をしているのだろう。

あまり表情の変わらない深紅が眉間に皺を寄せて、まるで変なものを見るかのように……っていうかどんな目で見てんのさ!!

「深紅!!」

「梓、早く行きましょう。兄さん達が心配です」

「っ……!わかってるわよ!!」

バックの中にしまっていた射影機を取り出すと、先行する深紅に続くように梓も後を歩いていく。

そして深紅が更に奥に続く戸を開けた瞬間――

「?!」

何かの気配を感じてふっと振り返ると、そこには一人の男、と思われる人間が立っていた。

とは言っても普通の人間じゃない。

まあこの”異常”な場所ならそれも普通なのかもしれないけれど、とにかくその男は普通じゃなかった。

顔はよくみえないが、何かに怯えるようにガタガタと震えている。

これは”ナニ”か。

それに気付いた瞬間私は射影機を構え、”ソレ”に向かってシャッターをきっていた。

どこについていたのかフラッシュの光により、一瞬部屋の中が明るくなる。

そのフラッシュの光でようやく”ソレ”の顔を確認することが出来た。

あれは――

「緒方・・・さん？」

間違いない、あの人はよく家に来ていた編集者の緒方さんだ。

でもなんで緒方さんが・・・もしかして姉さん達と一緒に・・・？

愕然としていた私を他所に、緒方さんは『縄が・・・縄が増える・・・』と呟き消えてしまった。

「・・・梓、緒方さんっていう方は？」

一連の出来事をみていたのだろう。

深紅が興味深そうに聞いてきた。

しかし愕然としていた私には冷静に説明なんかしている余裕なんてなく、とても拙い説明だけをして黙った。

もし、緒方さんが高峰先生や姉さん達と一緒に来ていたとしたら・・・。

そこまで考えて血の気がサツと引くのが解った。

「……。梓、少し休みましょうか？」

そんな私を気遣ってか、深紅は休憩を提案する。

その言葉に軽く頷きそうになり——急いで首を横に振った。

本当ならちよつと思考を切り替えるため休みたいところだけれど、今はどうにもネガティブにしか考えられそうにない。

それに姉さん達だけじゃなく、ソウちゃん達もそんな目に遭ってないか心配だから。

こんなところで……。立ち止まってる暇なんてないよね！

私達は先へ進むために廊下へ続く戸を開けた。

お互いの大切な人の無事を信じて。

しかし——

「・・・これ・・・」

「ソウちゃんの・・・木刀・・・？」

目の前が真っ暗になった瞬間だった・・・。

第貳夜 音擦れ（おとずれ）（後書き）

前書きや後書きがフリーダム！に定評のある九十九です。

まあ定評がある、なんて自分で勝手に言ってるだけですけどね！

本編がシリアスな話なのでその反動、とでもいいましょうか・・・
なんと言いましょうか・・・

奏「もともとボケてる人間なんだから素って言えばいいだろ」

・・・相変わらず言い方きついよね。

奏「そうか？」

まあいいけど。

・・・次回も出番なしにしてやる。

奏「それでちゃんとしたものが書けるってならそれでいいんじゃないの？」

・・・。。。

誰か癒しを下さい。

??「呼びましたか？」

いやいやいや、君まだ出てきちゃ駄目でしょうに。

??「名前伏せてるから大丈夫ですよ。それにもしもの時はそのまま後書き解説人として残るつもりですし」

いつ決めた?! ねえ! いつ決めちゃった?!

??「今じゃないですかね?」

・・・ですよねー

奏「まあアンタが本編出れるかどうかは九十九次第ってことだな」

??「そうですねー。私も早くソウ君達と本編で逢いたいです」

奏「なんでアンタもってここからはネタバレになるか」

??「あははー。取扱い注意ですねー」

奏「アンタが言うな!」

では恒例の次回予告

少女は詠う、鎮めの詩を。

少年は詠う

第参夜 災廻(さいかい) (前書き)

当小説は株式会社テクモ様作、零シリーズを元に作成された二次小説となります。

オリジナル設定

オリジナル登場人物

オリジナル展開

等

が気に入らない、または当小説を読み不快に思われた方は一刻も早く忘れてしまった方がいいかと存じます。

それでも全然構わない、ばっちこい！な方は鏡石を持参の上本編へどうぞ！

P・S ニヶ月も放置してすいませんでしたorz

第参夜 災廻（さいかい）

第参夜 災廻さいかい

．．．きて――

．．．音？

．．．く――

．．．いや．．．これは、声．．．？

い．．．がないと――

でも．．．誰の．．．？

「早く！起きなさい！奏君！」

頭に激しい痛みを感じ虚ろな思考が一気に覚醒へとひた走る。

「……？巴、さん……？」

目を覚ますとそこには巴さんと高峰先生が立っていた。

ってそうじゃないだろう！？

「と、巴さん！高峰先生！やっと見つけた！！早くここから出ないと！！」

あの女に触られた時死を覚悟したけれど、どうやら殺されなかったようだ。

「……。落ち着いて、奏君。今私達も出口を探しているところだから」

「……え？」

起き上がるとそこは囲炉裏の間だった。

確か俺はこの先の廊下であの女に捕まって・・・

「痛っ」

そこまで思い出し俺の思考は手に走る激痛で強制的にシャットダウンされた。

「これは・・・緒方君と同じ・・・」

俺の両手にはまるで縄で締め付けられたような痣が浮かび上がる。

それを見て巴さんは顔を顰めながら俺の痣を優しく撫でた。

「これ・・・一体どこでこんな」

呆然としながら見ていると痣はまるで何も無かったかのようにすっと消えていく。

けれど一度見てしまったものは、一度感じた痛みは、見えなくなってもまだ残り続けていた。

そんな俺の様子に巴さんは少し迷ったような顔をしたが、軽く目を閉じると再び口を開いた。

「奏君もあの白い着物を着た女性の霊に捕まったのね・・・」

奏君”も”・・・？もってことはまさか。

「・・・。君も犠牲者、というわけか」

高峰先生は小さく溜め息をつきながら目を瞑った。

「まさか・・・巴さんも、高峰先生も・・・？」

なんとなく、口に出さなければいけないと思いついてみると、二人は何も言わずただ首を縦に振るのみだった。

こんなことつてあるかよ・・・？！

呆然としていた俺に二人は掛ける言葉も無かつたらしく、しばらくの間沈黙が下りる囲炉裏の間。

しかしずっと落ち込んでいるわけにも行かない。

この腕についた縄の痕（もう見えなくなっではいるが）のことは後回し。

ひとまず今は真冬兄と合流してここから逃げ出さないと！

「それにしても君は一体どこから入ってきたのかね？ 私達より後から来たのだろう？」

そんな決意を固めていた俺に高峰先生は良く解らないことを聞いてきた。

「どこからって・・・俺は、玄関から、ですけど」

そこまで言っつてついさっき巴さんが言っていたことを思い出した。

『私達も出口を探しているところだから』

それは、どういう意味だ・・・？ まさか――

「あの・・・玄関、開かないんですか？」

恐る恐る尋ねる奏に巴と高峰は顔を見合わせると軽く溜め息をつき口を開いた。

「”視て”もらった方が早いわ。奏君、もう起きれるわよね？」

「ええ、はい」

「それじゃ、ついてきて？」

苦虫を噛み潰したような表情の高峰先生と巴さん。

俺は二人の後に続きながら囲炉裏の間から縄の垂れ下がっている廊下を通り、そして玄関まで来た。しかし、そこで視たものは――

「つ――？！」

視界から色が消え、視界が乱れるような感覚に襲われる。

そして現れたのは、わらわらと誰かを探すような、誰かを求めるよ

うな、紅い手の海。

「奏君にも視えたみたいね」

巴さんの言葉により現実に戻される。視界はすでに元に戻り、あの手はもう視えない。

「ッ・・・ええ。まあ」

相変わらず不機嫌な顔のまま巴さんは玄関を睨みつけていた。

高峰先生は俺や巴さんほど靈感がある方じゃないからあれが視えていなかったようだけれど――

あれを越えて行くことは不可能だ。

何か武器さえあればなんとかなるかも知れないが――

「ッ！セイ！！」

途端背後に何かの気配を感じた。

俺は脚に靈力を集中させるとそのまま体を捻りながら回し蹴りを放つ。

「っ・・・？」

足に感じたのは何か中途半端に硬い・・・サンドバックを蹴ったような感触。そして蹴った先に居たのは――

「緒方・・・君？」

障子に溶けるように消えていった男の霊を見て巴さんは呆然と呟き、高峰先生はその様子に目を丸くして驚いていた。

緒方・・・？そういえば真冬兄が編集者の緒方さんって人も居るって言っていたような・・・

「知り合い・・・ですか？」

俺の問いに二人は目配せをして眉を顰めていた。野暮なことを聞いてしまったのだろう。

もし俺の目の前に真冬兄の霊が立っていて知人に知り合いですか？と問われたら恐らくなんとも言えなくなるに違いない。

例え情報が欲しいから、といつても些か配慮が足りなかった、か。

「すいません……。失言でした」

もし俺の予想が正しければ、あの姿は将来俺達のものになるのだろう。

この屋敷から抜け出せず、そしてこの屋敷に囚われその住人の一人となる。

状況は限りなく悪い。

早く、真冬兄を探してこの屋敷から抜け出す手がかりを掴まないと

- - - - -

「落ち着きましたか？梓」

「・・・」

私達は縄のある廊下を抜け囲炉裏のある広間で休んでいました。

氷室邸について早々——と言っても探していた人物の生存が絶望的と解ったショックは相当だと思います。

そう・・・私達は視てしまったんです。

奏が白い着物を着た怨霊に掴まるその瞬間を。

奏は私の兄さんを逃がすために・・・あえて罔になってその怨霊と対峙して——そして掴まった。

その事実を知り、梓はすっかり意気消沈してしまいこの有様。

でももしあれが奏ではなく兄さんだったら——

考えたくないことだけれど、きっと私も梓と同じく意気消沈していたでしょう。

今の梓の姿はそのまま自分の未来の姿のようで——私は認めたくなかった。だから・・・

「梓。奏を探しましょう。きっとまだ・・・」

「・・・」

「・・・」

もし、私が梓と同じ立場だったら・・・。

こんなところで慰められても、私は動き出すことが出来るでしょうか？

私はどうすれば——

そんな時でした。

誰かの声が聴こえたのは・・・

- - - - -

『抜け出す方法——五つの・・・』

「え？」

今の声は——私は物凄く聞き覚えのある声が聞こえ辺りを見回した。

とはいっても前には囲炉裏、後ろは腐りかけた階段、右には何故か驚いた顔の深紅、左には・・・え？

「ソウ、ちゃん・・・？」

私は目の前の出来事が信じられずただ呆然としていた。

そこにいたのは間違いなくソウちゃん。

けれど——何かが違う……？

「ど、どうしたの？ソウちゃん！！」

ソウちゃんはまるで幽霊のように薄れて見えた。

それどころかまるで私達が見えていないように階段を上っていく。

「み、深紅……私——」

「………。追いましょう。梓」

やっぱり、見間違いじゃなかった！ソウちゃんは間違いなくここにいる！

ミシミシと軋む音が聞こえる階段を一気に駆け上がると、そこにはさらに別の部屋へと繋がる1つの戸。

もしかして——この奥に……？！

「待ってください。梓」

「どうして?! どうして止めるのよ?! 深紅! この中に・・・この向こうにソウちゃんがいるかもしれないっていうのに!」

無理矢理にでも進もうとする私は羽交い絞めにされ、って痛い痛い痛い痛い!?!?

「み、深紅! タンマ! ホント。ちょ・・・痛い痛い痛い痛い!?! ちょつと深紅?! 聞いている?! 聴こえている?! 深紅ちゃん? ミクミク? ちょつ、ごめん! 今のは失言、ってなんで別の技かけてんの?! や、あつああああああ?」

タップする私を他所に深紅はその戸に掛けられている和錠を見つめる。

みつくみつくにしてやんよ・・・なんて呟きが聴こえた気がしたけれど思わずスルーした。

ソウちゃん、タスケテ、わたし、なきそつ・・・。

- - - - -

「梓。この戸は閉まっているようです。この和錠の鍵を探しましょう」

倒れている梓に声を掛けるが、生憎梓の反応は乏しい。まあ目の前で奏が消えてしまったのだから致し方ないことだけれど。

「他の部屋や戸棚を探せば鍵が見つかるかもしれません。いきましよう、梓」

うつ伏せになりながらあー だの うー だの呻いている梓の手を曳きながらゆっくり一階の戸棚の方へ向かっていく。

道中背後から『ごめんなさい、ごめんなさい、痛い、痛いです、助けてソウちゃん』とオゾマシイ声が聞こえたけれどきつと霊が近づいてきているでしょう。早く離れなければいけません。

一階に下りたその時ふっと目の前を横切る紅い光。

暗い屋敷にいてなお、赤く発光するそれに私の視線はつい惹きつけられる。よく視ればそれは小さな羽根で空を舞う紅い蝶……。

自然と視線が紅い蝶を追っている自分に気付くと、その先には白い着物を着た10歳ぐらいの女の子が立っていた。

敵意は感じられないけれどその少女も間違いなく――霊。

『コツチ・・・』

少女が指差す先にあったのは一枚の大きな屏風。その屏風が一体何なんだろう？

再び少女に視線を向けるとそこにはもう少女の姿も、蝶の姿も存在しなかった。

あの少女の目的は何・・・？

私を惑わせること？

私を助けること？

普通に考えれば前者だけれど・・・。

ふと屏風に近づくと微量ながら風の流れを感じた。もしかするとこの奥に何かあるのかもしれない。

あの少女はこのことを教えたかったんだろうか？

そもそもあの子からは人を恨むような怪しい気配を感じなかった。どちらかといえば救いを求めるような眼差しだった気がする。

霊を思いすぎるとやがてその思いに引っ張られてしまう。けれど私は・・・あの子を信じてみようと思う。

「梓。この屏風をどかします。手伝ってください」

兄さん、奏。必ず助けますから・・・手がかりは少女と、紅い蝶――

第参夜 災廻(さいかい) (後書き)

ちよつとした裏話

実は今回の話、もともとは奏&巴達ストーリーと梓&深紅ストーリーの二つに分かれていた話だったんです。

けれど九十九の文才が無いという致命的な状態により致し方なく二つの話をあわせてようやく他の話と同じぐらいの長さに・・・。

AFO!だのばかめっ!だのつつこまれるかもしれませんが、これが九十九の全力であります。むしろ全力全壊であります!

これからも更新はしていく所存ではありますが、更新速度は(ryなので生暖かく見守っていただければと思います・・・orz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0652i/>

零～宵闇の詩～

2010年10月15日23時16分発行